

色麻のれきし

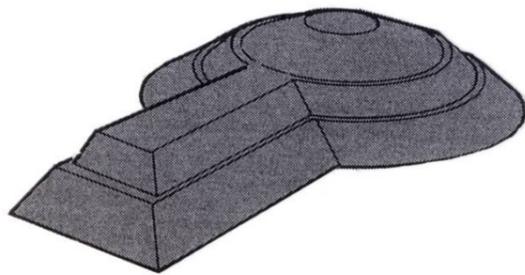
念南寺古墳

袋地区の林の中には、こんもりとした小山がたくさんあります。「古墳」という、土を盛ってつくられた大昔のお墓です。その中でも特に大きい一つの古墳が「念南寺古墳」です。

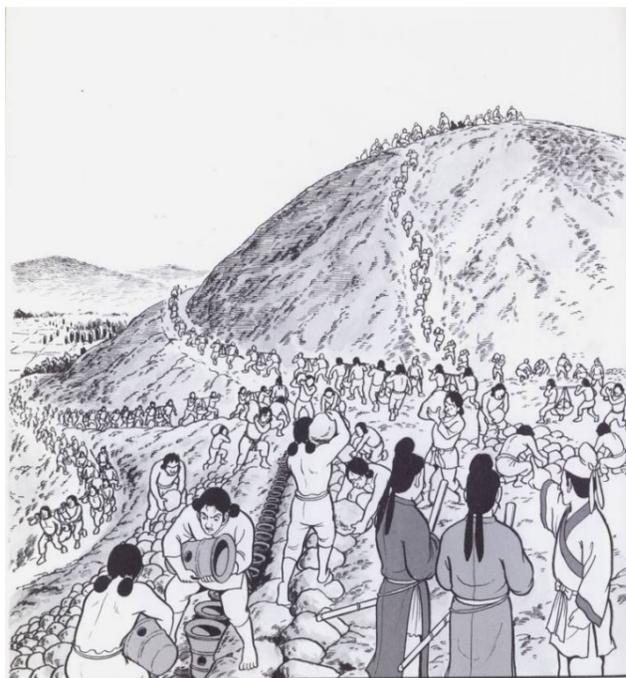
今から1,700年以上前、大きな古墳がつくられるようになりました。古墳はお墓ですが、普通に暮らしている人がみんな古墳のようなお墓に入ったわけではありません。古墳をつくるには大変な工事が必要で、そのためにはたくさんの人の力と時間が必要でした。そのため、古墳をつくり、それを自分のお墓にできたのは、「豪族」というその地域を支配していた人たちでした。豪族は自分の「力」を示すように、見晴らしのいい丘の上に大きな古墳をつくりました。

念南寺古墳もこの地域を治めていた豪族が、今から1,500年ほど前につくったと考えられています。長さが56メートル、高さが7メートルの立派な古墳です。上から見ると、「丸」と縦長の「台形」を組み合わせた形をしています。このような形の古墳は「前方後円墳」と呼ばれ、特に大きな力を持った豪族の墓といわれています。

古墳のまわりでは、黄土色や薄茶色をしたカケラを拾うことができます。これは古墳におかれた「埴輪」や土器のカケラです。埴輪は古墳に納められた人の魂を鎮めるために置かれたといわれています。



①前方後円墳のかたち



②古墳をつくるため、集められた人々

— 念南寺古墳発掘！！ —

念南寺古墳は平成9年に発掘調査されました。発掘調査とは、実際に土を掘って、くわしく調べることです。それによって、外から見ただけでは分からなかったことがわかります。

念南寺古墳の発掘調査では、頂上の平らな部分のふちに、埴輪がならべられていたことが分かったほか、平らな部分の真ん中からは、石でできた棺おけが見つかりました。東北の古墳では木でできた棺おけが見つかることが多く、石でできたものは珍しいのです。また、その形が家のようなのも特徴的です。同じような棺おけは、当時の日本の中心であった奈良県のあたりの古墳で使われたようです。このことから、念南寺古墳をつくらせた人物は、中央の豪族たちとつながりを持っていて、そのためにこのような棺おけをつくったと考えられます。

なお、「念南寺古墳」という名前は、昔この近くに安籠山念南寺というお寺があったのでこう呼ばれるようになりました。現在、そのお寺はなく、薬師さまを祀ったお堂だけが、残っています。



④ならんで見つかった埴輪



⑤念南寺古墳と同じかたちの埴輪



③念南寺古墳で見つかった石棺